こんなところに市民憲章

1．富士山のように　広く
思いやりの心をもち
たがいに助け合います

▷左から弘幸君、邦彦さん、博彦君、恵美子さん

家族新聞で交流

思いやりの心や、互いに助け合う気持ちは、温かい家庭から生まれます。

今泉4丁目の佐々邦彦さん一家は、「こころ」「子ども心」という家族新聞を月に一回発行している穏やか家族。邦彦さんは「こころ」の編集長で、長男博彦くん（吉二中3年）が「子ども心」の編集長。企画・取材から原稿依頼、レイアウトなどを妻の恵美子さんや次男の弘幸君（今泉小4年）とともに家族ぐるみで行っています。邦彦さんは「できたときの満足感が最高。家族新聞を発行する全国の家族と交流も進めています」と話しています。

＝初めまして!! 市民一年生です＝

東京文化はいややなあ、富士市はミニ東京にならないで。

大阪府羽曳野（はびきの）市から昨年みえた高橋さん（広見町一）ご一家、初めての転勤が幸運?にも富士市。夫婦とも浪速っ子で「文化は上方」というご主人に、愉快な取材をさせていただきました。

高橋さんちは、ご主人の伸之さん（三十六歳）、奥さんの和恵さん（三十歳）、長男の健太郎君（七ヵ月）の三人家族です。

―羽曳野市はどんな街

伸之さん「人口は十二万人ぐらい。古い街の周辺に新興住宅地が広がる大阪のベッドタウンです。狭い道も多く、ちょっと富士市に似ています」

―富士市の印象は

和恵さん「雄大な富士山に大変感激しました。これまで富士山を一・二回しか見たことがありませんでしたからね。友達から日本一いいところにいるじゃないといわれました」

―暮らしてみていかがですか

伸之さん「富士市の生活のほとんどが東京圏。味付け、言葉、新聞、テレビなどさまざまな面で文化の違いを感じます。こちらに来て大阪人だなと意識するようになりました。富士市はあまり東京化してほしくないですね」

和恵さん「そうよね、たこ焼きまで関東風なのはショック」（笑）

―行政の違いは

和恵さん「たまたま子供が病院の世話になったこともあって、医療費の戻ってくる乳児医療制度には助かりました。ただ、工場のにおいはなんとかしてほしいですね」

伸之さん「図書館が貧弱で、文化的な行事も少ないように思います。また、富士市は完全な車社会。公共の交通機関の発展は望めないのでしょうか」

―ありがとうございました。

△伸之さん（左）と和恵さん、円は健太郎君

ひと

酒の違いのわかる男
「きき酒」日本一に輝く

内藤啓司（ないとうけいじ）さん

（若松町・40歳）

とーとーやったね。市内のあちこちで、そう声をかけられる内藤啓司さん四十歳。日本酒造組合中央会の主催する、全国きき酒選手権大会個人の部で優勝したからです。「その日は、風邪を引いて体調不十分。だから、真剣でした」。

大会には、全国から集まった左党が九十人。女性も二十四人、ソムリエの人もまじっての勝負でした。内藤さんは、五年前に十位入賞。今度は、堂々の優勝です。

決め手は、記憶力。きき酒は、トランプの神経衰弱と似ています。二つの部屋に、それぞれ純米、吟醸、甘口など六種類の酒が用意されています。グラスに酒をつぎ、まず色を見、次に香り。最後に口に含んで、舌の上をぐるっと一巡。その酒に何を感じるのか、ポイントをしっかり記憶します。

当日のメモ。「香りなく甘い。さらっとうまい。舌にピリッ。酸味あり」など。自分の好みで部屋ごとに順位をつけます。ピタリと合ったのは、内藤さんただひとり。

酒は、浮気してもいい。「うまい酒は何だって聞かれるけれど、自分に合っているかどうかだと思う。三本の酒を買って、一番初めになくなるのが自分にとってのうまい酒。いろいろな酒を冷やか、かんかと考えながら飲むのは楽しいし、自分に合った酒を、合った量だけ。これがぜいたく」。

自宅の居間に『明日から禁酒』の木札。「これ、気に入ってます」と。